

「女の人って、やわらかいんだね……」

——この子、寂しいのかもね。

気持ちが悪くぐらつと揺れてしまったが、それがなんだか悔しくて、ツンとした表情をつくろった。

——任務よっ。任務っ！

「パイズリっていうのは、こういうことでしょうか？」

アリサはクールな口調を装って言うと、乳房をこねくるようにして押し揉みはじめた。

胸の谷間からのぞいている亀頭の鈴割れの部分から、透明な液がこぼれている。

粘度のある透明な液体が、ゆっくりゆっくり垂れていくさまは、祖母が使っていた日本製の洗濯糊せんたくのりを思わせた。

シーツを糊づけする習慣はS国にはないのだが、糊づけされたばりばりのシーツの心地よさは特別で、自分のルーツである日本にいつか行きたいと思ったものだ。

だからこそ、今回の任務はほんとうにうれしかったし、いきなりの中尉昇進は光栄だった。なのに、実態はバカでわがままな少年のお守り役で、彼に振りまわされている。

——ああ、もう、私ってなんなのよ……っ。もうっ！

ぎゅっぎゅつと力をこめて押し揉んでいると、さっきはかすかだった乳房の内側のズキズキが明確になってきた。

下腹と乳房は連動しているのか、乳房が痛むと下腹が疼くし、下腹の甘痛いうずうずが、乳房の内側をしこらせていく。

とくと音をたてて愛蜜が落ち、ショーツの内側を濡らす。

——やだっ。これって、これって……。

これではまるで、少年の男根を使ったオナニーだ。

「んっ……あ、アリサさん……き、気持ち、いいよ……」

啓太が、甘えているような声をあげた。

乳房の谷間に挟みこまれたペニスがむくむくと動きながら、大きさを増していく。びっくりするほど硬くなり、ドクドクと脈動する。焼けつくほどに熱くなってきた。

「や、やだっ」

アリサは急に怖くなり、乳房を押し揉む手を離した。

乳房の圧迫から逃れたペニスが前後に跳ね、アリサの顎をつつく。

——えっ？　こんなに大きくなっちゃったのっ!?

まるで蛇が鎌首をもたげて威嚇いかくしたみたいだった。だらんとしていたときは、かわいらしくさえ思えたのに、凶悪なほどに大きい。



アリサはまじまじと男根を見て、あわてたように視線をはずした。

——うわ、アリサさん、色っぽい……。

ゆらゆらと揺れる瞳がセクシーだった。

アリサの態度はやや軟化したみたいだった。さっきまでの、今にもリボルバーを抜きそうな、抜き身の剣みたいないな迫力は感じない。

「舐めてよ」

アリサはかすかにうなずくと、とろんとした表情で唇を開いた。口腔の赤さに見とれていたら、亀頭が温い口腔に包まれた。

自分のペニスが、アリサの綺麗な顔に隠れている様子は、ドキドキする光景だった。アリサは、ぱつと男根を吐きだすと、頬にかかる髪を人差し指で耳にかける。赤く染まった耳たぶと、うなじの白さが印象的だ。

「やだもう、髪が邪魔……」

顔を斜めにしてからもう一度口を開き、今度は肉茎のなかほどまでを口唇に入れた。

「う、うわっ、うわっ」

じゅっぷり熱い口腔の感触に思わず腰が弾んでしまう。

アリサは舌先を動かして、ペニスをモゴモゴしはじめた。チリツとした熱さが男根

を襲った。

うっとうめいて腰を引く。

ちゅぽつと音がしてペニスがはずれ、アリサが眉をひそめて不思議そうな顔をした。

「アリサさん、菌、あ、当たって……ちょ、ちよつと痛い」

「申しわけありません」

アリサはぜんぜん申しわけなさそうでない口調で言うと、つんと顎を逸^そらした。

「噛まないでね」

「噛んでませんっ！ もう一度やればよろしいのでしょうかっ!!」

口調こそ勇ましいものの、アリサはどこを見ていいかわからないとばかり、視線を泳がせている。

どこかおどおどした様子は、はじめのいかにもイヤそうな雰囲気とは少し違う。態度が軟化している、というのとも違う感じがした。

——もしかして……。

「アリサさん。チ×ポ、怖い？」

「こ、こ、怖くありませんっ！ ちよつ、ちよつと、お、大きかった、から……お、驚いただけですっ!!」

それは啓太には、しみじみとうれしい言葉だった。